

諸国敵討 武道伝来記 第二巻 見ぬ人顔に宵の無分別

井原西鶴著。「武道伝来記」は全八巻で、貞享四年(1687年)四月、大阪池田屋(岡田)三郎衛門刊。

福崎軍平は善連寺外記の妹の容貌が思ったほどでもないので婚礼の時に破談にする。悔しく思い詰めた妹は自害。怒った外記は軍平のもとに討ち入るが逆に討たれ、軍平は逃亡。外記の弟である八九郎は友の林人と共に敵討ちの旅に出る。

かくて二とせあまりも心をつくし、尋ねめぐり、信州戸隠山の社僧に内縁ありて、此を頼みにして其山中に住みけるよし聞出し、やるせなく心の燃る信濃なる其山に忍行き、ひそかに様子を聞くに、軍平道傳と名をかへ、世を遯れたる墨衣、佛もなき草庵をむすび、ひがしの山ばらに黙然として年月をおくるは、佛心にはあらず、臆病風に引籠り、世上をおそれての山居ぞかし、八九郎林八笹戸を踏破りて駈入り、軍平今月今日最期の覺悟と名乗かけしに、むかしの勇力出です、手

あは こうさん  
を合せ降参して、今はこの身になりて外記殿の御跡を吊らひ  
ければ、命をたすけ給へといふ、八九郎庵を見まはし、汝心  
ちゆう いっぱり ようじん まくらやり かたち すみぞめ いっしん いぜん  
中に偽あり、用心の枕鑑、形は墨染、一心は以前にかはらじ、  
いかに遁るべき、さあ立上がれと、責めかくれば、かなはじ  
やり と て うちおと せ  
と鑑を取る手を打落せば、かひぐ敷も打落されし手を左の  
て きりだち うちおと  
手にもち、林人が助太刀を打落し、林人を切伏せる所を、八  
と きりたふ  
九郎飛びかゝり切倒し、とゞめを刺し、林人が死骸に取付き、  
なげ かひ いま もじどりきつ はっしん つのくになかやまでら  
歎くに甲斐なく、今ははや、髻切て發心し、津國中山寺のほ  
とり身をかくし、外記林八兩人の後の世を吊ひけると、い  
にしへの名は朽ちずして、今に石塔のみ残り、  
せきたふ のこ

註 国立国会図書館デジタルコレクションで「西鶴集

第2編 図書（日本名著文庫）／井原西鶴 著（図

書出版協会、1912） 目次：武道伝来記（八卷）」

(DOI 10.11501/878455) の29～32コマ目。